

エリザベス朝・ジェイムズ朝に於ける演劇検閲の実態 ——トマス・ミドルトンの『チェスゲーム』をめぐって——

梅 宮 悠

エリザベス朝（1558-1603）・ジェイムズ朝（1603-1625）の芝居はすべからく検閲官の影響下で書かれ、如何なる劇作家であっても国の統制執行人から意識を切り離すことはできなかったといわれている（215）^{（1）}。あるいは、後のキャロライン朝時代（1625-1649）の演劇荒廃の要因が厳しい検閲の伝統にあると主張する研究者までいる（94）^{（2）}。このような状況のなかで、マーゴット・ハイネマン（Margot Heinemann）は、ジェイムズ朝に於いては検閲の強化と共に劇団が宮廷の庇護に依存する傾向が強まり、宗教的・社会的問題について大衆劇場の場で触れることが難しくなったと述べる（151-2）^{（3）}。一方、特にエリザベス一世（Elizabeth I; 1533-1603）の治世下以来、戯曲の検閲官として活動した祝典局長（Master of the Revels）は、支配的な権力をふるいながらも、友好的な関係を役者たちと築くことで、真に反逆的な内容の漏洩を防いでいたとの見解もある（96）^{（4）}。しかし、検閲官によって認可を与えられているにも拘らず、国をあからさまに糾弾していると捉えられかねない危険な戯曲も、事実今日にまで伝わっているのだ。本論ではそのような戯曲の筆頭であるトマス・ミドルトン（Thomas Middleton; 1580-1627）の『チェスゲーム』（A Game at Chess）を例に挙げ、当時の検閲の実態を検証する。これによって戯曲と公権力の関係の一端が明らかになると思われる。

『チェスゲーム』は1624年8月5日にグローブ座（The Globe）の舞台に上げられ、上演に携わった国王一座（The King's Men）は当時の通例であるレパートリー制の上演形式ではなく、日曜日を除く9日間の連続上演を実施した（10-7）^{（5）}。イングランド演劇史上初のロングラン公演を行ったということ以外にも、この劇には特徴的な点が幾つか含まれている。同時代の他の作品とは異なり、手書き原稿の類い（6種類）が、書籍版（四つ折り本が3種類）よりも多く現存していることや、当時の有力者の劇に言及する書簡が多数残されていることがまず挙げられるだろう。しかし、戯曲の取り扱い危険きわまりない内容こそ、何よりも注目されるべきである。

ERROR. I saw the bravest setting for a game now
That ever my eye fixed on.

IGNATIUS. Game? What game?

ERROR. The noblest game of all, a game at chess
Betwixt our side and the White House, the men set
In their just order ready to go to it.

IGNATIUS. Were any of my sons placed for the game?

ERROR. Yes, and a daughter too, a secular daughter
That plays the Black Queen's Pawn, he the Black Bishop's.

IGNATIUS. If ever power could show a mastery in thee
Let it appear in this.

ERROR. 'Tis but a dream,
A vision you must think. (The Induction. 40-49) ⁽⁶⁾

劇の開幕間もない位置に置かれている序幕では、上記のように舞台上に展開される物語がチェスの試合であることが確認されるだけではなく、舞台上の物語が飽くまでエラー（Error）の夢の具現化という仕組みが述べられる。しかし、“my sons” とのイグナティウス（Ignatius Loyola）の言葉は、“sons” がイエズス会の使徒であることを暗示し、彼らと白陣営（White House）の対峙が劇の大枠であることが示される。これは劇空間が虚構ということを改めて確認する実に慎重な幕開けとしながらも、イエズス会を黒陣営（Black House）と見立てて、白陣営、即ちプロテスタント国イングランドとの衝突が予言されていることになるのだ。

加えて、引用部分から少し進んだ53行目と54行目では、時として城（Rook）と呼ばれる駒が、劇中では公爵（Duke）と呼ばれる約束事が述べられる。時代の状況から見て、公爵に呼称を変えることが、直接的に1623年に起こった皇太子チャールズ（Prince Charles; 1600-1649）とバッキンガム公（George Villiers, 1st Duke of Buckingham; 1592-1628）のスペイン訪問を連想させることになるのだ（69）⁽⁷⁾。

1623年のスペイン訪問とは、カトリックとプロテスタントの融和を願い、親スペイン寄りの政策を目指したジェームズ一世（James I; 1566-1625）が、後のチャールズ一世である皇太子をスペイン王女（Maria Anna of Spain; 1606-1646）と結婚させようとしたことから起こっている。両国の条件が噛み合わなかったために膠着状態に陥った事態を打破すべく、チャールズ皇太子はバッキンガム公と秘密裏にマドリッドを訪れ、直接交渉を行ったわけだ。スペイン側の理不尽な改宗強制などもあり、縁談はあえなく破談となった。事態の決着と皇太子の無事の

帰国に国民は歓喜し、そこから国は一気に反スペインの様相を帯びるようになったと言われている (10-13)⁽⁸⁾。この一連の外交的事件に暗躍していたと考えられるのが初代ゴンドマル伯 (Diego Sarmiento de Acuna, 1st Count of Gondomar; 1567-1626) で、『チェスゲーム』では黒騎士 (Black Knight) と呼ばれる劇の中心的悪役として登場している。その顕著な場面が山場となる第四幕第四場で白騎士 (White Knight) と白公爵 (White Duke) が黒陣営を訪れる件に表れている。

BLACK KNIGHT.

I will change

To any shape to please you, and my aim,
Has been to win your love in this game.

WHITE KNIGHT.

Thou hast it nobly, and we long to see
The Black House pleasure, state and dignity.

BLACK KNIGHT.

Of honour you'll so surfeit and delight
You'll ne'er desire again to see the White.

(4.4.42-48)⁽⁹⁾

黒騎士の欺瞞に満ちた歓待ぶりや、二度と白陣営に戻ろうとは思わせないとするあたりは、まさしく史実を彷彿とさせるだろう。黒騎士に関しては、当時の書簡等から彼の身体的特徴までもが舞台上ではゴンドマル伯を模倣したことが明らかになっている (195)⁽¹⁰⁾。この黒騎士と対峙する形で配置されているのが白騎士と白公爵で、当然のことながらそれぞれチャールズ皇太子とバッキンガム公に充当する (1830)⁽¹¹⁾。ジャージー・リモン (Jerzy Limon) は、他の多くの研究者と同様に、白陣営と黒陣営の衝突を、プロテスタント使徒のイングランド人とイエズス会使徒を含むスペイン人とのせめぎ合いと見た。また、白陣営の反撃は白騎士と白公爵によって達成され、現実世界のチャールズ皇太子とバッキンガム公の功績に重なり付け加えている (129)⁽¹²⁾。

ここまで如実に現実を映し出し、存命の有力者までを登場させた『チェスゲーム』だが、この作品は公演に先立つこと2ヶ月の1624年6月12日、検閲の任に当たっていた祝典局長、ヘンリー・ハーバート (Henry Herbert; 1595-1673) による正式な認可を受けている (192)⁽¹³⁾。当時の検閲対象の項目をG・E・ベントリー (G. E. Bentley) は、次のように分類した。即ち、国策に対する批判的な発言、友好国の否定的描写、宗教論争に関わる内容、神を冒瀆する言葉、そして有力者を個人的に風刺したものとなる (167)⁽¹⁴⁾。ハイネマンはここに「好意的であっても有力者に触れる描写」という一項目を加えている (39)⁽¹⁵⁾。『チェスゲーム』は特に親スペイン政策を主張するジェイムズ政権に反発し、スペインを誹謗し、

イエズス会に対する欺瞞を指摘し、大使職を辞しているとはいえ、存命中のゴンドマール伯を悪役に据えるだけに留まらず、利権のために改宗を繰り返したとされるマルコ・ドミニス (Marco Antonio de Dominis; 1560-1624) までを肥満主教 (Fat Bishop) として登場させ、風刺しているのだ。このように幾つもの問題を孕む戯曲が認可を得たことについて、認可から公演までの不可解な2ヶ月をどのように解釈すべきか、考察する必要があるだろう。しかし、まずはイングランドに於ける検閲がどの様に始まり、推移したのか、更にはどの程度に公平を極めるものであったのか、それらを検証したい。

上演に対する検閲官の存在を仄めかす証拠としては1549年11月のものがまず挙げられる。時あたかもエドワード六世 (Edward VI; 1537-1553) の治世 (1547-1553) となるが、これは大衆俳優によって上演予定のインターロードをロンドン市債務監獄補佐 (Secondaries of London Compter) の2名が検分し、その結果を受けてロンドン市長 (Lord Mayor) が上演の可否を決めるというものであった (261)⁽¹⁶⁾。翌1550年5月には、ロンドン主教 (Bishop of London) のニコラス・リドリー (Nicholas Ridley; c.1500-1555) が、ロンドン主教管区牧師、及び副牧師にインターロード、劇、詩歌の類いで聖公会祈禱書に批判的なものはないかの調査を命じている (234)⁽¹⁷⁾。メアリー女王 (Mary I; 1516-1558) 治下 (1553-1558) では、1553年8月に布告が出され、女王の書面による許可がなければ書物、バラッド、韻文、論説、論考の印刷、並びに劇の上演が禁じられている (6-7)⁽¹⁸⁾。エリザベス一世統治下にあっても、1559年の布告で演劇、小唄、詩歌の類いに於いて、祈禱書を貶める言葉を発することは禁止され、罰金や罰則も定められていることから (115-6)⁽¹⁹⁾、宗教論争を引き起こしかねない内容に対して国や教会が初期から一貫して敏感であった実情が窺える。そして程なく演劇と検閲を強く結びつける人物、エドモンド・ティルニー (Edmund Tylney; 1536-1610) が祝典局長に就任し、かつての歴代局長には与えられなかった特権を獲得することになった。

1581年に交付された件の特許状により、ティルニーには検閲を施行する権利、並びに上演を差し押さえる権利を始め、国中の演目を事実上統括する力が与えられた (286)⁽²⁰⁾。こうして演劇への多大な影響力を持つことになったティルニーの指示は、シェイクスピア (William Shakespeare; 1564-1616) の関わりや筆跡を見るために度々取り上げられる『サー・トマス・モア』 (*Sir Thomas More*) の手書き原稿のなかに認められる。

Leaue out | y^e insur<rection> wholly & | y^e Cause ther off' & | egin w^t S^r
Tho: | Moore att y^e mayors sessions | w^t a reportt afterwards | off his good

service | don being Shriue off Londo | vppo a mutiny agaynst y^e | Lubards only
by A shortt | reportt & nott otherwise | att your own perrilles | E Tyllney (A)⁽²¹⁾

原稿冒頭にある上記の文言では、暴動に関わる記述をすべて削除すること、イタリアのロンバルディア人 (Lubards) の暴動に際してモア (S^r Tho: | Moore) が示す活躍ぶりを簡潔に報告程度で済ませることの二つが命じられている。作中の他の修正指示の多くが市民や徒弟の暴動に関係していることから、1590年代初頭の外国人排斥運動を刺激する要因にもなりえた内容が、『サー・トマス・モア』に求められた修正部分であったと考えられる (18)⁽²²⁾。

ティルニーの後に局長職を継いだジョージ・バック (George Buc; 1560-1622) の検閲例は『第二の乙女の悲劇』(*The Second Maiden's Tragedy*) の原稿に見られる。具体的な変更指示は、現代編者のアン・ランカシャー (Anne Lancashire) によってまとめられ、7つのタイプに分類された。即ち、神への暴言、宮廷人や貴婦人に向けられた痛烈な言葉、王の持つ欲への言及、大逆罪を認める発言、現実政府を暗喩する場面、そして宗教問題にかかわる台詞である (276-80)⁽²³⁾。実質的な任期が1年半ほどしかなかった次代ジョン・アストリー (John Astley; unknown-1641) の検閲の実態を知るとは困難だが、ティルニー、バック両人の例を一瞥するに、ランカシャーが述べたように、当時の検閲は倫理的な理由というよりも政治的な理由から施行されていたように思われる (275)⁽²⁴⁾。ここから推察できるように、ティルニー以前には宗教的な事項が重点的に検閲されていたのに対し、祝典局長の権力拡大に伴い、政治的な内容までも注視されるようになったようである。

アストリーから局長職を買い取ったハーバートは、自身の記録簿の中に、バックが検閲を行ったものについて再考の後に条件付き認可とした事例や (185)⁽²⁵⁾、アストリーの認可したものへの処遇を、新しい修正指示が無視されたのを理由に台本没収に処した記録として書き留めている (143)⁽²⁶⁾。歴代の検閲官の認可を見直したのはハーバードが初めてで、彼は自らの厳格な検閲態度を1633年10月21日付で以下のように説明している。

All ould plays ought to bee brought to the Master of the Revells, and have his allowance to them for which he should have his fee, since they may be full of offensive things against church and state, ye rather that in former time the poetts tooke greater liberty than is allowed them by mee. (182-3)⁽²⁷⁾

かつて詩人が教会や国について挑戦的な表現をなしたというのは、1605年5月

27日に布告された「役者の神への罵倒禁止令」(*An Act of Restrain Abuses of Players*)を意識したものなのか(338-9)⁽²⁸⁾、それとも前任者たちの検閲がハーバートの目に余るほど緩やかなものであったためか、上の記録だけでは断言できない。しかし、ここに改めて政治的、そして宗教的問題作を禁じる検閲官の姿勢が窺えるのである。

こうして見てくると、政治と宗教の両面からして危険な要素を孕む『チェスゲーム』の検閲通過がいかに例外的であったかが理解されるだろう。戯曲に認可を与えた証拠はハーバートの記録ではなく、6月の枢密院(Privy Council)の記録に見られる(204)⁽²⁹⁾。この認可をもって国王一座は8月に連続上演を行い、その結果スペイン大使の訴えで差し押さえになったのだが(193)⁽³⁰⁾、後に没収された舞台台本については、記載事項に一切の変更を加えることなく上演されたことが証言されている(204)⁽³¹⁾。ハーバートの認可が与えられた6月から実際に上演された8月までの2ヶ月という空白期間に、台本に手が加えられた可能性は、R・C・ボールド(R. C. Bold)などによって指摘されている(180)⁽³²⁾。換言すると、上演中の台詞と没収台本の内容に相違はないが、認可を得た検閲済みの台本と上演台本が別種のものであったということである。現存する手書き原稿の痕跡を検べると、確かに認可を受けた後にも加筆修正は続けられ、そこにはミドルトンの直筆も見られる。更に改作部分には検閲官の要望と思われるもの、あるいは検閲官を意識したものまでが認められる。しかし、T・H・ハワードヒル(T. H. Howard-Hill)によれば、随時加えられた様々な手直しは、戯曲の特性である時世の風刺を弱めるものでも強めるものでもなく、不認可になっても不思議ではない程に痛烈な風刺の内容は、祝典局長に原稿が提出された当初から描かれていたという(18-9)⁽³³⁾。

初期段階から社会批判を多く含んだ作品が上演されたということで、当然ながら上演に関わった人物たちは罰則を受けている。枢密院による上演中止、台本の没収、10日間に渡る劇場の閉鎖、300ポンドの罰金、役者の逮捕と作者の投獄が言い渡されたのである(170)⁽³⁴⁾。検閲違反の演目が舞台上げられた際に課される最も重い処罰としては、上演の中止、台本の没収、劇場の閉鎖、役者が作者、あるいは双方の投獄、劇団の座長交代などが命じられたという(194)⁽³⁵⁾。『チェスゲーム』に対する懲罰は、処罰の中でも限りなく重いものであったと認識できるが、結局は役者が無罪放免となったこと、早々に劇場が再開されたこと、一日およそ200ポンドの売り上げを9日間続けたにもかかわらず300ポンド程度の罰金ということなどから、門野泉はこれを寛大な処置と判断している(122-1)⁽³⁶⁾。更に門野は、上演に踏み切った役者たちにしても劇場封鎖を覚悟しつつも厳罰は下されまいと確信していたとし、ここに有力な庇護者が介在していた可能性を示

唆する(123-4)⁽³⁷⁾。同様の見方はベントリーも主張するところであるが(171)⁽³⁸⁾、このように扱われた『チェスゲーム』が、歴代検閲官の中でも格段に厳格であったハーバートの検閲を通過したということは、何としても不可解である。処罰が最小限に留められているから有力者が関わっていたと考えるよりも、認可が得られたということ自体に劇作家、劇団、あるいは興行主の背後に、権威のある人物の存在が感じられるのだ。

検閲官の裁量に有力者が異議を申し立てた記録は、ハーバートの前任者であり、着任後一年半余りで職務を譲り渡したアストリーのものとして残されている。

6 Sept. 1622, for perusing and allowing of a new play called *Osmond the Great Turk*, which Mr. Hemmings and Mr. Rice affirmed to me that the Lord Chamberlain gave order to allow of it because I refused to allow at first, containing 22 leaves and a page. Acted by the King's players [...] (119)⁽³⁹⁾

これから読み取れることは、国王一座によって上演された『偉大なるトルコ人オズマンド』(*Osmond the Great Turk*)には、当初アストリーの認可は与えられなかったが、ジョン・ヘミングス(John Heminges; 1556-1630)とジョン・ライス(John Rice; c.1593-1630)は、宮内庁長官(Lord Chamberlain)の命を受けて、認可の主張をなしたということである。つまり、検閲官が不認可を決定した戯曲であっても、権力が上位に位置する人物の申し渡しがあれば、認可を与えることもあったのだ。

引用に言及された宮内庁長官が、三代目ペンブルック伯爵(3rd Earl of Pembroke)であったことも興味深い。三代目ペンブルック伯爵のウィリアム・ハーバート(William Harbert; 1580-1630)と言えばキャサリン・ダンカン・ジョーンズ(Katherine Duncan-Jones)が、シェイクスピアの『ソネット』(*Sonnet*)の贈り先として最有力候補と見た人物で(52-69)⁽⁴⁰⁾、またシェイクスピアのファースト・フォリオ(*First Folio*)が献呈された人物に他ならない(A₂^r)⁽⁴¹⁾。加えて、国王一座の前身の宮内庁一座(Lord Chamberlain's Men)の頃から看板役者であったリチャード・バーベッジ(Richard Burbage; 1567-1619)の死を悼む一文を残していることから(119-20)⁽⁴²⁾、ペンブルック伯爵の演劇への傾倒、更には国王一座との関わりは密であったと考えられる。

ハーバートという姓を持つペンブルック伯爵は、系譜から見ても、検閲に無関係とは言いがたい。というのも、彼こそが『チェスゲーム』の検閲を行ったヘンリー・ハーバートの血縁関係にある人物だからである。加えて彼は、劇中で好意

的に扱われる反イエズス会のプロテスタント信者であり、反スペイン精神の持ち主であった。このような背景から、ハーバードは祝典局長の職務に就いて間もなくペンブルック伯爵の意見を聞きながら戯曲の検分を行っていたと考える向きもある(21)⁽⁴³⁾。差し押さえの後に開かれた『チェスゲーム』の審議会にペンブルック伯爵は出席していなかったようだが、同戯曲の再演禁止を条件に劇場再開を許可した王の意向が、彼の手紙によって伝えられた点を考慮すると(22)⁽⁴⁴⁾、ペンブルック伯爵と『チェスゲーム』との確実な接点も生まれてくる。もっとも、現存する資料だけでは、ハーバートの相談役としてペンブルック伯爵が助力していたのか、伯爵自らの反スペイン、反カトリックを主張するプロパガンダの材料としてミドルトンに執筆させ、ハーバートに認可を出させたのか、軽々に判断することはできない。しかし、アストレーの局長時代に誇示した発言力や、国王一座との関わり、ハーバートとの血縁や反スペイン派のプロテスタントだったという外的要因の数々を考慮すると、ペンブルック伯爵が本件の裏で暗躍していたという憶測も不可能ではない。

ここで現存する一時資料の検証が必要となってくる。先に述べたが、複数の原稿には編纂の跡が見られ、これが検閲を通過した後に加えられた可能性も否定できないとなるとなおさらである。しかし、『チェスゲーム』の複数の原稿の関係性は、ミドルトンの直筆原稿が含まれているにも拘らず非常に曖昧なものになっているのだ(2-10)⁽⁴⁵⁾。確定的なことは1624年8月13日と付されているラルフ・クレイン(Ralph Crane; 1555-1632)による原稿が最も初期段階の原稿と考えられることと、クレインによる3番目の原稿で、現在は英国オックスフォードのボドリアン図書館に所蔵されているものには、ミドルトンというよりはクレイン自身の手が加わっているということぐらいである。しかも、1624年のクレイン原稿は、上演よりも後の日付を示しているものの、上演に至る前の未完成原稿と考えられている(3)⁽⁴⁶⁾。

このように複雑な状況にある『チェスゲーム』の総合的な検証を行い、ハーワードヒルは作品の編纂を行ったわけだが、ギャリー・テイラー(Gary Taylor)は、1624年原稿を初期版(An Early Form)、他の版を総合したものを後期版(A Later Form)として作品の出版を行っている。テイラーの前期、後期という認識に従うと、『チェスゲーム』がどのように推移していったのか見ることが可能となるわけである。顕著な変更箇所としては、プロローグとエピローグの追加、マルコ・ドミナスを模倣した肥満主教の追加、黒公爵(Black Duke)が実在の誰を指すのかの明瞭化、白王歩兵(White King's Pawn)として作中に登場している財務大臣(Lord Treasurer)のミドルセックス伯爵(Lionel Cranfield, 1st Earl of Middlesex; 1575-1645)への言及の増筆、終幕部分の加筆が挙げられる。他にも細かいとこ

ろを見るとト書き (Stage Direction)、発話者 (Speech Prefix) や物語の進行の調節が行われているが、特に興味深いのはミドルセックス伯爵を仄めかす台詞が増やされ、更に黒公爵が実在の人物と繋げられたということである。前者から述べると、ミドルセックス伯爵と言えば、1624年1月の時点でも親スペインを主張していた数少ない権威者で、皇太子チャールズとバッキンガム公と対峙する関係に会った人物である (1798)⁽⁴⁷⁾。一方、後期版で明らかになった黒公爵はガスパール・デ・グスマン (Don Gaspar de Guzman, Count-Duke of Olivares; 1587-1645) とされ、彼はバッキンガム公がスペインを訪れた際の好敵手であったと考えられている (1800)⁽⁴⁸⁾。二点をまとめると、どちらもバッキンガム公を支援するような要素が追加されているということになるのだ。

以上見てきたように、イングランドにおける初期検閲の基準は主に宗教的統制、並びに政治的統制を目的に厳しく実践されていた。しかし、アストリーの検閲結果にペンブルック伯爵が異議を申し立てたことと同様に、『チェスゲーム』の背後にも有力者の存在を感じずにはいられない。検閲官ハーバートとの関係も考慮すると、外的要因からペンブルック伯爵の介入が疑われたが、テイラーによって実現された初期版と後期版の比較をすると、ルイス・B・ライト (Louis B. Wright) の主張したバッキンガム公、あるいはチャールズ皇太子の関わりまでも現実味を帯びてくる (1777)⁽⁴⁹⁾。『チェスゲーム』の認可から上演までの空白期間については、劇の編集期間としてだけではなく、王を始め、国の有力な人物たちがロンドンから離れている時期を見極めていたとする見解もあるようだが、実際有力者全員がロンドンを離れることはなく、しかも大衆劇場で何が起きているのかなど、権力者たちは気にかけていなかったとさえいわれている (20)⁽⁵⁰⁾。そうすると逆に、国王や国の中心的人物たちの意向に反するものを、敢えてクーデターの種として国民を扇動しようと画策する有力者がいたならば、戯曲上演への介入こそが恰好の手段として利用できたということになる。『チェスゲーム』の処遇に対して、ジェームズ王の親スペイン政策に反発し、チャールズ皇太子、バッキンガム公、ペンブルック伯爵のいずれかが、もしくは数人が、または全員が検閲の歪曲を強要したと断じることは、それこそ余りにも危険である。しかし、検閲の通例をふまえた上で、『チェスゲーム』を検証すると、上演に迫り着くには作者ミドルトンや国王一座の面々が持ち合わせていなかった権力を備えた有力者の助力が必要だったように考えられる。即ち、英国初期検閲は厳格でありつつも、時として権力者の介入による変更を許容していたことになるのだ。

注

- (1) Janet Clare, *'Art made tongue-tied by authority' Elizabethan and Jacobean Dramatic Censorship*, Manchester: Manchester University Press, 1990.
- (2) Glynne Wickham, ed., *Early English Stages 1300-1660*, Vol.2, 2 ed., London; New York: Routledge, 2002.
- (3) Margot Heinemann, " 'God help the poor: the rich can shift' : the world upside-down and the popular tradition in the theatre ", *The Politics of Tragicomedy: Shakespeare and After*, Eds., Gordon McMullan and Jonathan Hope, London: Routledge, 1992.
- (4) Richard Dutton, *Mastering the Revels: the Regulation and Censorship of English Renaissance Drama*, Iowa City: University of Iowa Press, 1991.
- (5) Thomas Middleton, *A Game at Chess*, ed., T. H. Howard-Hill, Manchester: Manchester University Press, 1993.
- (6) Ibid. 本論の引用、行数言及に利用する The Revels Play 版は、手書き原稿と四つ折り本の各種を比較し総合的に編まれている。その理由について編者ハワードヒルは、短い期間に小さなグループ内で原稿の編纂が行われた経緯と、ミドルトンの度重なる介入が認められる現状を考慮し、底本を一つ定めるのではなく総括的な検証が必要とした(49-57)。
- (7) Ibid.
- (8) Ibid.
- (9) Ibid.
- (10) Ibid.
- (11) Thomas Middleton, *Thomas Middleton: The Collected Works*, Eds., Gary Taylor, John Lavagnino et al., Oxford: Oxford University Press, 2007
- (12) Jerzy Limon, *Dangerous Matter: English Drama and Politics in 1623/24*, Cambridge, Cambridge University Press, 1986.
- (13) See Howard-Hill ed.
- (14) Gerald Eades Bentley, *The Profession of Dramatist in Shakespeare's Time 1590-1642*, Princeton, N.J.: Princeton University Press, 1971.
- (15) Margot Heinemann, *Puritanism and Theatre: Thomas Middleton and Opposition Drama Under the Early Stuarts*, Cambridge: Cambridge University Press, 1980.
- (16) E. K. Chambers, *The Elizabethan Stage*, Vol.4, Oxford: Clarendon Press, 1923.
- (17) Walter Howard Frere, ed., *Visitation Articles and Injunctions of the Period of the Reformation*, Vol.2, London: Longmans, Green & Co., 1910.
- (18) Paul L. Hughes and James F. Larkin, eds., *Tudor Royal Proclamations*, Vol.2, New Haven; London: Yale University Press, 1969.
- (19) Ibid.
- (20) See Chambers.
- (21) *The Book of Sir Thomas More*, Ed., W. W. Greg, London: Oxford University Press, 1911.
- (22) *Sir Thomas More: A Play by Anthony Munday and Others*, Eds., Vittorio Gabrieli and Giorgio Melchiori, Manchester: Manchester University Press, 1990.

- (23) Ann Lancashire, ed., *The Second Maiden's Tragedy*, Manchester: Manchester University Press, 1978.
- (24) Ibid.
- (25) Henry Harbert, *The Control and Censorship of Caroline Drama: the Records of Sir Henry Herbert, Master of the Revels 1623-73*, ed., N. W. -Bawcutt, Oxford: Clarendon Press, 1996.
- (26) Ibid.
- (27) Ibid.
- (28) See Chambers.
- (29) See Howard-Hill ed.
- (30) Ibid.
- (31) Ibid.
- (32) R. C. Bald, *An Early Version of Middleton's Game at Chesse*, *Modern Language Review*, Vol.38 (1943), pp.177-80.
- (33) See Howard-Hill ed.
- (34) Ibid.
- (35) See Bentley, *Profession*.
- (36) 門野泉、「『チェス・ゲーム』の問題性—トマス・ミドルトンの風刺喜劇の真の標的を求めて—」、『英米文化』、40 (2010)、pp.111-127。
- (37) Ibid.
- (38) Gerald Eades Bentley, *The Jacobean and Caroline Stage*, Vol.3, Oxford: Clarendon Press, 1956.
- (39) Ibid.
- (40) William Shakespeare, *Shakespeare's Sonnets*, Ed., Katherine Duncan-Jones, Nashville, Tenn.: Thomas Nelson, 1997.
- (41) William Shakespeare, *The First Folio of Shakespeare: Norton Facsimile*, New York: W.W. Norton, 1996.
- (42) Ann Jennalie Cook, *The Privileged Playgoers of Shakespeare's London, 1576-1642*, Princeton, N.J.: Princeton University Press, 1981.
- (43) See Howard-Hill ed.
- (44) Ibid.
- (45) Ibid.
- (46) Ibid.
- (47) See Taylor et al ed.
- (48) Ibid.
- (49) Ibid.
- (50) See Howard-hill ed.

